慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』(第十五～二十章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XV–XX) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.60 (2015. 3) ,p.269(98)- 286(81)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Suzuki Junji et au professeur Hayashi Emiko = 鈴木順二教授・林栄美子教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20150331-0286

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』（第十五～二十章）（翻訳）

山本武男

これまでのあらすじ

フランス第二帝政初期のパリ近郊に住む中産階級、モープラン家のどこか不安な雰囲気漂う家族の肖像。結婚適齢期を迎えてなお父親を恋人の様に慕い、見合い相手を見下し続ける末娘ルネ、恋愛も不倫も出世栄達の手段と割り切る野心家の長男アンリ。ルネは絵画、音楽なども自ら嗜む知的で自意識の強い娘である。ある日、モープラン夫妻とアンリとルネは、馬車を駆って旧知の大富豪ブルジョ家の邸宅を訪ねる。ルネの少女時代の友人でブルジョ家の娘ノエミを誘って、モープラン家の文藝サロンで若者たちによる芝居を上演しようと持ちかける為である。広壮で豪華な邸宅は当時のフランスの大ブルジョワの暮らしぶりを彷彿させる。提案は合意が得られ、本番に向けて稽古に励む日々が始まった。だが、これから展開する物語で芝居の当日、思いも寄らない出来事が起る。

〔翻訳〕

十五

「三時よ」ルネが編んでいた小さな毛糸の長靴下から目を上げて、振り子時計に目をやりつつ言った。「やはり今日は、ノエミ、来ないんじゃないかしら、そんな気がしてきたわ……すっぽかす積りなんだわ……罰金を払わせてやらなきゃ」

「ノエミ?」眠りから目覚めたかの様にモープラン夫人が反応した。「だってあの子、来ないわよ……ああ！あなたに言っていなかったわね……私とした事が、すっかり忘れていたわ……前回、あの子、私に今日はたぶん来られないだろうって言っていたわ……あちらのおうちで、お客さんをお迎えしなきゃならないらしいの……その筈よ……はっきりとは思い出せないけれど」

「何てことなの！　こんな嫌なことってないわ、人を待って、その人が来ないだなんて。今朝、目が覚めたとき、あたし、ノエミが来る日だわって独りごとを言って……あの子が来るのを楽しみにしていたのに……ああ！間違いないのね、今はもう彼女が来ないってことが……おかしいわ、再会して縒りが戻って以来、ここのところずっとノエミのことが恋しいの……家族の一員のように恋しいのよ……彼女のことを面白い人だとは思わないけれど……元気が足りないし、陽気でもないし……知的にも、あまり優れているほうじゃないし……あの子、簡単に言いくるめられてしまうでしょ！　それで、そういう性質をひと通り整理して眺めてみて、にもかかわらず、あたし、あの子に魅力を感じてしまうのよ……あの子、ほんとに、とっても穏やかなものを持っている……それ

が相手にも影響するんだわ。一緒にいると神経が安らぐのがはっきり分るくらいよ……それから、あの子がいいのは、人の心を温めてくれるところじゃないかしら、そうよね？　ただそこにいてくれるだけでいい。あの子よりずっと優秀な若い女の子の知り合いがいるけれど、でも、あの子のような性質の人はいないわ、他の人たちといると、身も細る思いがするくらいなんだもの」

「おっと！　そんなのはよくある話さ」とドノワゼルが言った。「ブルジョさんところのお嬢さんは生まれ付きとても優しく、とても思いやりがあるんだよ……こういう性質の人からはその情愛が他の人にも移るものだよ……」

「そういえば思い出すわ、あの子、幼いときから今と同じようだった、繊細な子だったわ！　泣いたり、抱き締めたりするときの彼女って、びっくりするくらい情が溢れてた！　そんな子だった……ほんと、ありのままの姿を見せる子よね。あの子の綺麗さは、持ち前の優しさと、あの大人になりきらない感じからきているんじゃないかしら……特にあの子の視線……人ってよく自分のなかにずる賢さや意地悪なところを持っているけれど、あの子の目に触れると、それが解けてしまうかのように何処かへ消えてしまうのよ……あたし、あの子をからかったこと、一度もないの、信じられるかしら？　あたしって、他人をからかうのが、前からずっと大好きだったのに！」

「あの子があれ程までに感じがいいのは、やっぱり驚きよね」とモープラン夫人が答えた。

「そんなことないですよ、けっこう説明の付けられることですよ」とドノワゼルが返した。

「生来人が呼吸をする能力をもつように、生まれつき愛する天分に恵まれている若い人、そういうものを想像してみてください、その子が、互いに良さを理解できない母親を持ち、その母親の冷淡さに疎外され、財産を唯一のわが子と看做し、それ以外には誇りも愛も感じない父親のエゴイズムに抑圧されたら！　すると、この若い

人というのがブルジョさんのところのお嬢さんのようになります、つまり、いま話しているような、見返りを求めない思いやりの深さや、感情の流露と云ったことが目につきます。彼女の心はおのずから溢れ出て広がっていく……我々はそんな人のなかにルネがさっき言っていたような視線を、涙に輝くような視線を見出すことになるのです」

十六

稽古が始まって一週間が過ぎたころ、ブルジョ夫人は直々（じきじき）に娘をモープラン家に連れてきた。さっそく夫人は賞賛の言葉を述べたが、主人公の男優がその場にいないことには驚きの色を隠さなかった。

「あら！　アンリは不思議なくらい記憶力が良いんですのよ」とモープラン夫人が言った。「二度稽古したら、もう大丈夫なの」

「そう、で、稽古の進み具合はどうなのかしら？」とブルジョ夫人が訊ねた。「正直を申しますと、うちのノエミがしっかりと演じられるかどうか、とても心配なのよ……ちゃんと役がこなせているかしら？　まずはあなたにお会いしたくて来たんですけれど、ぜひこの目で娘の演技を見極めてやろうと……」

「それなら、奥様」とモープラン夫人。「ご心配には及びませんわ……お嬢さまのなかに、天分を見出されることと思いますよ……或る種の調子をお持ちでいらしって……いや要するに素敵なんですの……」

俳優たちは持ち場につき、『気紛れ』を演じ始めた。

「あの子を、甘やかされましたね」始めの数場を見てブルジョ夫人がモープラン夫人に対して言い、それから娘に向って「感情が籠ってないじゃないの、あなた……暗唱してみなさい……フランス人の観客に対してはどう

演じるべきかを見せに、お芝居に連れて行ってあげたでしょ。さあ、お続けなさい、どうぞ」
「ああ！　奥様」とルネ。「そんな風に言われると、団員皆を怖気付かせてしまうわ……大目に見ていただかないと」
「あなたを基準にものを言わないでね、お嬢さん」とブルジョ夫人が返した。「もし私の不器用な娘があなたのように演じられたなら、こうは言わないわ……」
「それではお嬢さま」とドノワゼルがブルジョ嬢に声をかけた。「第六場に参りましょう。この場面で真価を問うてもらえれば……と言うのも、ここなら、お嬢さまも高く評価され、演技指導者としての私の虚栄心もいささか満たされようというものですから……お母様も、私の指導を認めてくださることでしょう……」
「あら！　あなた」とブルジョ夫人。「この場合、わたくし、完全に、演技指導者と生徒を分けて考えておりますので、あなたに責任は負わせませんことよ……」
そうしてその場が演じられたあと、
「それよ、驚いたわ！　それでいいのよ」とブルジョ夫人が歓声を上げた。「いいじゃない……これなら大丈夫……泣き言をいう場面だから、あの子にあっているし、それにあの子も出来るだけのことはしているもの……この場に関してはこれ以上あの子に言うことはないわ……」
「まあ！　厳格な評価ね」とモープラン夫人が言った。
「母親として当然の厳格さよ」溜め息のような声でブルジョ夫人が漏らした。「きっと、満員になるのじゃないかしら」
「あら！　ご存知？」モープラン夫人が応えた。「ここのところ、いつも予想以上にお客さんが入るのよ。どれも、好奇心をそそるらしいの……わたしは優に百五十人の観客を見込んでいるわ」

「ねえ、ママン、リストを作ってもいいかしら？」とルネが言ったが、それは話題を変えて、疲れ始めているノエミの為に稽古を中断しようとしているのであった。「招待客の一覧表を作って、ブルジョ夫人に招待客を紹介したらどうかしら。奥さま、あたし、知人たちをご紹介致したいんですの」

「たいへん結構ですわ」とブルジョ夫人。

「ちょっと、いろいろな分野の人たちが混ざっていますけど、そう前もってお知らせしておきます。乗合馬車で出会った人たちのように見えるんじゃないかと思います……」

「ああら！　いいじゃない……そうであるべきよ」とブルジョ夫人。

そしてテーブルに坐ると、ルネは人々の名前を鉛筆で書きながら声にも出しはじめた。

「まずこの家族は……飛ばしましょう……お次は、だーれ、ご覧になります？　シャニュ夫人とそのお嬢さん、あの子の歯、塀の上に並べられたガラスの破片みたいなのよね、ご存知？……ベリザール夫妻、お知らせしとくと、この人たちは馬に自分たちの名刺を食べさせているってもっぱらの噂……」

「ルネ！　ルネ！　ほら……あなた、人格を疑われるわよ……」とモープラン夫人が窘（たしな）めようとした。

「あら！　あたしの評判はもう出来上がっているもの……その方面では、もう失うものはないわ……おまけに、回復の見込みがないと思われていたりして！」

「彼女の好きなようにさせましょう、どうぞ、そうさせてあげて」とブルジョ夫人がモープラン夫人に言った。そうして、ルネのほうに微笑みながら振り向いて「お次は？」

「ジョブロー夫人……あら！　この人の、テュイルリー宮でルイ＝フィリップ国王に紹介されたときの自慢話は退屈よ、「か、閣下が、か、閣下が！」そればっかり！……アランブール氏、この人はほんの僅かな埃も気になる手合い……夏には、召使をパリに残して、寄せ木張りの床の筋を磨かせるの！……ラ・ボワー

ズ嬢、この人は分詞の用法の憲兵のような存在！　昔の小学校の先生で、会話中に相手の接続法半過去の用法の誤りを指摘する……ロリオ氏、蝮被害根絶協会の会長さん……クロクマン家、パパ、ママ、子供たち、こんな風になって高音域で歌う家族、牧神（パン）の笛みたいよ！……ああ！　そうそう、ヴィヌー家はパリ在住だけど、お招きするには及ばないわ、だってあの人たち、訪ねるのは乗合馬車の路線沿いに住んでいる人たちだけなんですもの。おっと、メシャンさんちのトリオを忘れていたわ……三姉妹……バティニョールの三美神よ。ひとりはお馬鹿さん、ひとりは……」

そのときルネは、ノエミが怖がるような目の色、怯えるような視線で見上げているのに気が付いて話をやめたが、そのノエミの様子は、人の良い、心を鎧わないやわな存在が、隣で巻き起こったこれら全ての悪態の連打によって急激に心底、困惑と不安を感じているといった風だった。立ち上がって、ルネは彼女に駆け寄って抱き締めた。

「ばかね！」とルネはノエミに優しく言った。「この人たち全員が、あたしの仲間で、その陰口を叩いているって訳じゃないのよ！」

十七

アンリは最後の方の稽古にしか参加しなかった。彼は戯曲の中身を知っており、一週間で準備ができた。が、『気紛れ』は夜会の長さに比べて短すぎた。そこで、公演の後に軽喜劇を演じたらどうか、という意見がでた。パレ・ロワイヤルで上演された二三の短い戯曲が試されたが、団員の数が十分でなく却下され、そのあと当時ブールヴァールのある劇場で掛けられて成功を収めていた道化芝居で我慢しようという事になり、アンリはそれ

を採用し、ブルジョ嬢が理由も言わずに反対したり、恥ずかしがって思いのほかの抵抗をしてもお構いなしであった。

ところで、ここで特筆すべきは、アンリが参加し始めて以来、ブルジョ嬢がその生来の気質から解き放たれたように見え出していたことである。ルネは時々、ノエミの内面が別人のものになってしまったのではないかとさえ思った。ルネは彼女への友情が冷めていくのを感じた。ルネはノエミのなかに普段まったく知らなかった矛盾した精神の働きを見出して驚かされた。また、ノエミが兄のアンリに向うときのある種の気配、お高く留まった口調が漂わせる軽蔑にも似た冷たい空気に傷ついた。ところが兄の方はといえば、ノエミに対して礼儀正しく、愛想がよく、丁寧で、そうして、それだけであった。さらに、彼がノエミと演じる場面においてはいつも、彼はひどく遠慮気味で、落ち着き払って控えめだったので、本番では大丈夫かしらと心配になり、彼が役の中で冷めてしまうのを恐れたルネは、ある日、冗談に紛らしてそのことを忠告した。「なにを言ってるんだ！」兄が答えた。「ぼくは、言わば名優のようなものなのだよ、つまり本領は、初日までとっておくのさ」

十八

モープラン家の客間の奥に、小さな舞台が備え付けられていた。葉の茂み、松の枝、花咲く潅木の連なりが脚光燈を覆い隠していた。ルネはデッサンの先生に助けられて、幕にセーヌの川岸らしきものを描いた。舞台の両端には手書きの張り紙があり、こう書かれてあった。

ラ・ブリッシュ・ショー

本日の演目
気紛れ
道化師ビガム、以上二本

さらに俳優たちの名が続けて書かれてあった。

舞台の前に詰めて並べられた館の椅子には、全席ローブ・デコルテ姿の女性がひしめき、スカートやレース、ダイヤモンドの輝きや肩の白さを競い合わせていた。客間は二つ戸を外すことで食堂および小部屋にまで拡張され、そこからは白いネクタイをした男たちが背伸びをして見ていた。

『気紛れ』の幕が開いた。ルネはレリー夫人の役をかなりの熱意を込めてこなした。夫を演じたアンリは、しばしば感情を表に出さない若者や真面目な社交人士たちの間に垣間見られる、サロンで催される演劇の俳優としての大才を披露した。ノエミはといえば、アンリの芸に支えられ、楽屋からドノワゼルに台詞を完全に助けてもらい、大勢の観客に一寸酔い気味になりつつも、どうにか見られる程度に棄てられた女のほろりとさせる脇役を演じた。この結果に、ブルジョ夫人はすっかりほっとした気持ちになった。最前列に陣取った彼女は、心配しながら娘の演技を追っていたのである。彼女の自尊心は娘がへまをする事をなにより恐れていたのだった。幕が下り、割れんばかりの拍手となり、皆さんお見事！　という声援が飛んだ……娘が立派にやり通したので、ブルジョ夫人はこの大成功に仕合せでいっぱいになり、悦に入ってこの歓声、意見、礼賛の渦のなかに身をひたらせていたが、社交界での演劇の例に漏れず、喝采の後に来るこの喧騒は徐々に小声になった。こうしてぼんやりと聞こえてくるようになった周囲の声の中で、隣の話し声がはっきりと、全体の物音から切り離されたかのように彼女の耳に届いた。「そうよ、あれが彼の妹よ、よく知っているわ……でも、役柄に反して、彼は彼女を十分に

愛している様には見えなかったわ……棄てた筈の妻を本当に心から愛しているみたいだったわ、あなた、気が付いて?」そしてこう話している女はブルジョ夫人に聞かれているのを感じて、話し相手の耳元へ口を持っていってしまった。ブルジョ夫人は真面目になっていた。

幕間が済んで、幕がまた上り、アンリ・モープランはピエロの恰好で再登場したが、キャラコのぶかぶかの服に伝統的な黒頭巾の姿ではなく、イタリアの道化の出で立ちで、真っ直ぐなフェルト帽を被り、ゆったりしたジャケットから靴先まで白繻子の衣装で身を固めていた。女性たちの間に動揺が走ったのは、服装と言い、容姿と言い、魅力的と看做されたからであり、そんななか、軽喜劇が始まった。それは、既婚であるにもかかわらず別の女と結婚したがるピエロのばか話で、古い道化芝居のレパートリーの中からある通俗喜劇作者がある詩人の協力を得て発掘した恋愛混じりの笑劇である。ルネは、実に様々な変装をして一人何役もこなしつつも、今度は、夫の浮気を通して棄てられる女に扮したが、一方のノエミは、求愛される女を演じた。アンリはノエミとの愛の場面を高揚したものにした。彼は若さと、情熱と、勢いとをもって演じた。誓いの場面では、彼は自ずから横溢する愛の誓いがもつ叫びに似た調子で喋った。さらに彼の相手は世界で最も美しいコロンビーヌだったので、その夜のノエミは、バルースから拝借したドビュクールの版画、『新婦のメヌエット』に基づいてデザインされたルイ十六世時代の婚礼服に身を包み、崇拝に値する美しさであった。

ブルジョ夫人の周囲では、魅惑された気配が客間全体へ広がり行くような気配があり、愛し合う美しい二人を励ます観衆の同情的な複雑な思いが感じられた。芝居は展開していった。時折、アンリの視線が脚光燈越しにブルジョ夫人の目を探しているように見えた。しかし、ルネが村の代官に変装して現れると、もはや契約に署名するばかりとなった。ピエロは愛する人の手を取って、彼女と味わうべきあらゆる幸福を語りだした……

ブルジョ夫人の隣の女性はその肩に少し夫人が寄り掛かっているように感じた。アンリは長い台詞を上手にや

り遂げ、芝居は結末を向え、終了した。突如、ブルジョ夫人の隣に坐った女性は、その腕に沿って何かが滑り落ちるのを見たが、それは気を失ったブルジョ夫人その人であった。

十九

「あら！　お戻りになって、ね、どうぞ」ブルジョ夫人は彼女を取り囲んだ人々に向って言った。彼女は、外気に触れられるように庭に運び出されていたのであった。「直りました、もう何とも御座いません、暑さのせいですわ……」彼女は青白い顔色のまま微笑んだ。「ちょっと外気に当るだけで大丈夫ですから……わたしとアンリさんの二人だけにしてくださらないかしら……」

人々は立ち去った。足音が聞こえなくなるや、「あの子のことが好きなのね！」ブルジョ夫人はアンリの腕を鷲掴みにしてそう言ったが、その指には熱が籠っていた。「あの子のことが好きなのね！」

「奥さま……」とアンリが言った。

「お黙りなさい！　あなたは嘘吐きです！」そして彼女は彼の腕を押し返した。アンリは会釈した。「すべてわかっているわ……すべて見てしまったの……さあ、わたしを見なさい、ほら！」そして凝視して、彼の目の中を探った。アンリは、彼女の前でうなだれていた。「ねえ、一言でも何か言ったらどうなの！……噂になっているわよ！……ああ！　よくお聞き！　あなたはあの子とだけ真に迫ったお芝居が出来るんだって！」

「ロール、何と申し上げたらよいのでしょう」アンリは出来るだけ優しい、出来るだけはっきりした声を出して言った。ブルジョ夫人は、ロール、とその名を呼ばれたことで、胸を打たれたように身を引いた。「奥さま、一年前から、わたくしは戦ってまいりました」アンリは話し続けた。「申し開きのしようもありません……です

が、何もかもがわたくしの心を縛ってしまったのです……私たちはほんの小さな頃からの知りあいです。そして、たいへん残念ですが、奥さま、あなたに真実をお話ししなければならなくなりました、わたくしはあなたの娘さんを愛しております、それが真実です……」

「あんたはもしかして、あの子にまだ何も言っていないわけ？　わたし、顔が赤くなってきたわ、沢山の人がいるっていうのに！　まさか、あの子のこと、ただ見詰めていただけだってわけでもないでしょう？　じゃあ、あなたたち二人の間で何があったの？　言ってちょうだい。あんた、あの子が綺麗だと思えて？　さあお答えなさい！　わたしの方が綺麗でしょ！……馬鹿よ、男なんて！……それにあんたを、あたし、あんたを可愛がり過ぎたんだわ……さあ、行っておしまいなさい、あの子にあんたの自尊心をくすぐってもらって、あんたの虚栄心を満たしてもらって、あんたの野心をおだててもらって支えてもらいなさい……だって、あなたは野心家でしょ、あなた、わたくし存じ上げていてよ！……ああ！　モープランさん、こういうチャンスは一生に一度きりしか巡って来ないのよ！……そしてその相手は、わたしくらいの年の女の人、わたしの様に年のいった女性以外にはないのよ、お分かり？　愛する男の将来を愛でてあげられるのは！……あなたはわたしの愛人ではなかった、あなたはわたしの可愛い子供だった！」特にこの言葉を喋ったときの彼女の声は腹の底から出たものだった。それから急に調子が変わって、「でも、言わせてね！　あなたはあの子を愛してすらいないわ、わたしの娘を、そうでしょう、本当の愛じゃないわ、だってあの子は金持ちだもの！……」

「ああ！　奥さま！」

「何てことかしら！　こういう例は幾らでもあるわ……人から教えてもらったわ……はじめに母親に手を付けて、最後に持参金をせしめる、その手の手法がときどき成功するのよね……百万もの金で面倒な仕事もせずにすむ……」

「声を落としてください、お願いですから……あなたご自身のためです……人が窓を開け始めましたから……」

「とてもご立派ね、冷静でいられるなんて、モープランさん、とてもご立派よ……とてもご立派」ブルジョ夫人は繰り返した。その彼女の声は低く細く、胸元から押し出されてくるようであった。

空には雲が棚引き、月に掛かっていたが、それは夜に飛ぶ鳥たちの翼の様に見えた。ブルジョ夫人はぼんやりと、眼前の夜闇を眺めていた。両肘を両膝において、しゃがんだまま踵(かかと)の上に坐り、何も言わずにいた夫人は繻子の靴の先を動かし並木の砂を何度か乱した。そしてまもなく、彼女は背を反らすと、目覚めたばかりの人がするように両腕をふらふらさせてよろめき、それから活発ながらぎくしゃくした動きで手をドレスと帯との間の入れ、手の甲をリボンに押し付け、当りをやわらげた。ようやく彼女は立ち上がって歩き出した。アンリは彼女に付き従った。

「あなた、わたくし、もうあなたとは、二度と会わないつもりよ」彼女は振り返らずに言った。

池の傍を通るとき、彼女は彼に向ってハンカチを差し出した。「わたしのために、これを湿らせて」

アンリは片膝を縁石に突いてレースのハンカチを泉に浸し、それをまた彼女に返した。それで彼女は額や目を拭った。「さあ、帰りましょう」と夫人が言った。「腕をかして」

「まあ！　奥さま、なんて健気なんでございましょう！」モープラン夫人はそう言い、戻ってくるブルジョ夫人を迎えに行った。「でも、ご無理でございますわ……奥さまのお車をお呼び寄せさせましょう……」

「いいえ、結構でございます」ブルジョ夫人は強い語気で言った。「ありがとう存じます……歌をお歌いする約束をしていた筈ですわ……わたくし、歌いたいんですの……」

そしてブルジョ夫人は、優雅に、また力強い足取りでピアノの方へ進み出たが、その勇敢な微笑の下には、古今の役者が観衆に知られずに秘めてきた内なる涙と生々しい心の傷があった。

二十

二つの大きな商家の社会的理由によって結婚し、知りもしない男と利害の一致によって結び付いたブルジョ夫人は、この男に対し一週間もすると、妻が夫に対して持ち得るあらゆる種類の軽蔑の感情を抱くようになった。それは、彼女には理想に対する強い要求があったとか、若い娘が抱きがちなロマンチックな空想で来るべき結婚を満たしていたとか、そういうことが原因なのではなかった。人並みはずれて聡明で、その真面目な精神が読書や勉学、さらには男まさりの素養により形成され培われたこの女性は、人生の伴侶に、知識人以外は求めず、その人の知能に既婚女性としての野心と自尊心を賭けられる存在、要するに今日、金銭の富に箔を付けて人生を完成するあの手の幸運の持ち主、現代社会の間隙を縫って国庫省や財務省の大臣に跳ね上がるような未来ある男を欲していたのだった。が、こういった全ての願いはこの夫と結ばれることで、みるみるうちに潰えてしまい、日ごと彼女は絶望的になりゆく空虚感、彼に自分の同類を求めたゆえに満たされずに深まりゆく欠如感を抱くようになり、狭い心、目立ってけち臭い性格、子供の気質に特有の激しさや弱さが混在し、それらに煩わされた心象のことごとくを夫に見出す羽目になったのである。

自尊心が強く、また状況がその自尊心を助けた為、ブルジョ夫人は長く姦通を犯さずに来た。青春時代は冷淡な性格で、南フランスの家系の血を引くブルジョ夫人は、目鼻立ちがはっきりし過ぎていて、見ていて心地良い美人などではなかった。三十歳くらいのころに太り出し、若き日とは別人のように見えはじめ、その目鼻立ちは各々の個性は保っているものの、優しさや愛嬌が感じられるものとなり、人相本来の角々しさは影を潜め、顔立ちが微笑みを湛えたものになった。それは言わば、季節の終りの美しさのようなもので、年齢がある種の女性た

ちに与えるこの手の美しさは、二十歳の頃の顔が見たいと人に思わせ、実際とは異なる青春像を夢見させてしまうものである。またこの年になるまで、ブルジョ夫人は危険で熱烈な関係や抗いがたい誘惑などとは無縁であった。自分の趣味に合った社交界、取り巻きたち、自分のサロンに集う男たちや身近な人々はけして彼女を真剣に自衛しなければならないような状況に晒したりはしなかった。彼らの大部分は、学士院の会員、学者、初老の文人、政治家たちで、みな近代人であり、物静かに老成していて、ある者は過去を動かし、ある者は現在を動かしているといった類の人々であった。ほんの僅かなことにも喜びを見出す彼らは、些細なこと、例えばドレスの衣擦れの音や、心地よい言葉や、彼らの話に聞き入る相手の視線に幸福を感じていたものであった。そんな彼らの学者肌の礼賛に取り囲まれていたブルジョ夫人は、然したる危険を感じることもなく、女性助言者の戯れで彼を自分の取り巻きの地位にまで昇らせたのであった。この行為も、初期の彼女にとっては遊び戯れる火ではあっても、燃え盛る炎などではなかったのである。

実際、ブルジョ夫人はその人生の成熟期に達していた。彼女の人相や体つきの変化はある一定の完結を見ていた。彼女は十分すぎるほどの健康や生命の横溢に却って不安を覚え、彼女の肉体は力を得たが、道徳心の方はそれを失うかのようであった。大いに讃えるべきこれまでの自分に比べてみても、彼女は魂の堅実さや自尊心の確かさの減退を感じていた。アンリ・モープランが彼女のサロンに登場したのは、正にそのような時期であった。彼は、若くて、知的で、真面目で、奥ゆかしく、さらに、結婚する前、理想の夫に要求していた、人生に勝つための冷静で持続的なあらゆる性質を身に着けているように彼女の目には映った。第一印象で、アンリは状況を把握し、これからのチャンスを見通すことができたので、自身の計画を、一気に、この女性に、恰も獲物に襲い掛かるかのように、託すことにしたのである。

彼は彼女に言い寄ろうとし始めたが、夫も子供もあり、二十年間にわったて貞操を守り通してきた、パリじゅ

うでも重要な地位に就いているこの女性は、彼にほとんど付け入る隙を与えなかった。が、初めての差し向かいでの会話では、彼女はパリの辺境のレストランにいる売笑婦さながらの、気まぐれで愚劣な、ほとんど奇妙ともいえる仕草を以て自分を投げ出してしまったので、周りにいた四十前で漸く居間に入るのを許され始めたような使用人たちにさえ皮肉られてしまう仕末であった。

それ以来、満たされるたびにその愛は激しくなり、世のなかの例に違わず、この年齢の女性の肉に棲みはじめた情熱は、その血を湧かすまでに至った。おまけにアンリは彼女を誤らせ、その過ちに彼女を縛り付ける術に長けていた。彼は、一瞬たりとも内に秘めている疲れや、無関心や、余りにも簡単な成功の後に男が感じる軽蔑のうずきや、恋する女がするなんとなく馬鹿げた仕草への嫌悪の情を、面に表したり、漏らしたりすることは決してなかった。彼は常に優しく、いつも感動しているように見せていた。彼は、ある一定の年齢を過ぎると女性が、愛からも、また愛人からももはや期待しなくなる包み込むような柔和さや激しい嫉妬、過度の執着、親切や思いやり等々をブルジョ夫人に対して示した。彼は彼女を娘として扱ったのであった。彼は夫人が嵌めている初聖体の指輪を形見に呉れとまで言った。子供っぽさや媚態など、この主婦の情熱がなせる眉を顰めたくなるような全てのことどもにアンリは耐え、顔に不快の皺ひとつ現さず、口調が皮肉に流れることもなく、それらを愛おしむ態度で接した。同時に彼は、彼女を手懐けつつも、冷淡な面持ちの若い男を征服したと思い込むことから来る陶酔感を貴重なものに思わせ、誇らせることで、彼女の全人格を手中に収めた。このように、この女性を征服し、その全体を所有するに至ったアンリは、さらに上辺だけの冒険的な逢う瀬を重ねつつ、二人の仲が孕んでいる危険性を示唆し、彼との愛ですべてを失うかもしれないと興奮しているこのブルジョワ女の空想を、恐ろしさや危うさによって犯罪小説が醸すような不安な緊張感を煽ってほんのりと酔わせ、彼女の理性を乱れさせた。

遂に彼女は、彼によってしか、そしてまた彼のためにしか生きることができなくなり、彼の存在、彼の考え、

彼の未来、彼の姿、彼と会って彼から与えられるものだけが、彼女の生き甲斐になってしまったのだった。彼と会って、別れるときには、彼女はその手を恋人の髪の毛に何度も差し入れ、それから素早く手袋をはめるのだった。その日の間じゅう、そしてまた翌日も、その手は洗わず、家の中で夫や娘の傍にいるときも、両の掌を嗅ぎ、彼の髪の香りに接吻しては恋人を呼吸している気になるのであった！

今晩の、この裏切り、この一年の交際の後の破局はブルジョ夫人を叩きのめした。最初に彼女は一撃のもとに人生が終るような印象を受けた。最初の瞬間には、自分はもう死ぬのではないかと思われ、そう思うと安らぎすら感じられた。が、翌日になると、もう彼女はアンリがまた来てくれるのではないかと期待していた。征服されてしまった彼女は、もし彼が来たら、許しを請い、自分が間違っていたと言い、昨日のことは忘れて、優しくして欲しい、愛して慈しんで欲しいと頼む肚を決めた。彼女は一週間待ってみたが、アンリは来なかった。彼女は彼に、自分が出した手紙を返して貰う為に会いたいと伝えると、アンリはそれらを返送してきた。彼女が、永遠の別れを告げるため最後に一度会いたいと手紙を書いても、彼は返事をしなかったが、彼の友人たちの話や、新聞や社交界の噂を通して知った、貧しい階級の窮乏について最近彼が書いたある記事に対する起訴騒ぎが、ブルジョ夫人の関心を独占した。一週間のあいだ、彼女の思考や夢想は、軽罪裁判所、憲兵、監獄など、女の劇的な空想力が裁判の先に見るすべてのことどもで埋め尽くされていたので、検事総長がブルジョ夫人に裁判は行われないことを保証したすぐあとは、これまで捉われていた恐怖でまだ怖気付いてはいたが、力尽き、感極まって、こらえ切れずに、彼女はアンリに手紙を書いた。

「明日の二時にまいります。もしいらっしゃらなければ、階段のところでお待ちします。踏み段の上に坐っております」

（つづく）

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 137–151.